

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書

研究代表者 所属・職名 幼年教育領域・教授
 氏名 山口美和
 研究期間 令和5年度～令和6年度

研究プロジェクトの名称	架け橋期の教育の充実に向けた幼保小の接続のあり方に関する研究
研究プロジェクトの概要	<p>本プロジェクトの目的は、5歳児から小学校1年生にかけての2年間（以下、「架け橋期」という）の学びを充実したものとするための幼保小接続のあり方について、全国の先進的事例の収集及び教育委員会や学校・園への聞き取り調査等を通して明らかにすることである。</p> <p>令和5年度は文部科学省「幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業」に採択された自治体のうち、滋賀県、京都市、横浜市を訪問し、教育委員会の幼保小接続担当者への聞き取り調査、及び研究指定園の視察等を実施し、先進的な取り組みの状況を確認した。</p> <p>令和6年度は、教育委員会主導でエリアごとの架け橋期の接続の取組を行っている宮古島市を訪問し、教育委員会及び平良第一小学校・平一幼稚園等への聞き取り調査を行った。また、上越市内の公立小学校校長及び公立保育園園長を対象として、幼保小接続の取組状況に関する質問紙調査を実施するとともに、新潟県教育庁を訪問し、県内の架け橋プログラムの進捗状況について聞き取り調査を行い、上越地域における幼保小接続の現状と課題について意見交換を行った。</p>
研究成績の概要	<p>先進自治体への聞き取り調査の結果、教育委員会のリーダーシップのもとで就学前施設と小学校とを繋ぎ、架け橋プログラムの推進に取り組むことが、幼保小接続の環境整備の条件として不可欠であることが明らかになった。園と学校との関係においては、小学校が主導的に園との連携・交流の体制づくりを進めることが重要であり、互いに足を運びあって同じ目線で子どもの姿を見る機会を増やし、子ども観を共有していくことが、架け橋期における子どもの学びの実質的な接続に繋がることが示された。</p> <p>また、幼保小の接続を進める際、地域の特徴を踏まえ、地域の実情に合わせて取組を進めることが重要であることが示唆された。特に、施設類型の異なる複数の園が存在している小学校区の場合、各園の教育方針の多様性を互いに尊重しつつ、園同士が交流する工夫が求められると同時に、多様な園を包摂する架け橋カリキュラムを作成することの難しさも推測された。</p> <p>上越地域は県内でも特に架け橋プログラムへの取組の遅さが指摘され、教員養成大学としての本学の果たすべき役割の重要性が示唆された。</p>
研究成果の発表状況 (※今後の予定も含む。)	山口美和・白神敬介・大島崇行・平間えり子・中山卓 (2025)「幼保小の対話を通した『架け橋期』接続の実態と課題—『架け橋プログラム』先進自治体への聞き取り調査を通して—」『上越教育大学教職大学院研究紀要』第12巻
学校現場や授業への研究成果の還元について	令和7年度の「教職員のための自主セミナー」の中で研究代表者が主催する「これからの保育と幼小接続を考えるセミナー」において、本研究プロジェクトの成果報告の機会を設け、学校現場の教職員に成果を還元する予定である。